



生涯にわたるキャリアの形成に向けた看護基礎教育 の課題：看護専門学生の調査を基に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺田, 明矢子, 木村, 育恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006902

生涯にわたるキャリアの形成に向けた看護基礎教育の課題

—看護専門学生の調査を基に—

寺田明矢子・木村 育恵*

北海道教育大学大学院教育学研究科

*北海道教育大学函館校教育社会学研究室

Issues in Basic Nursing Education for Lifelong Career Development

—Based on the Investigation of Actual Conditions of Nursing Students—

TERADA Ayako and KIMURA Ikue*

Graduate School of Education, Hokkaido University of Education

*Department of Educational Sociology, Hakodate Campus, Hokkaido University of Education

概 要

本稿では、仕事も生活も含めた生涯にわたるキャリア形成を展望していくための看護専門学校の基礎教育の課題を検討した。看護専門学校の基礎教育を修了し、入職直前の学生を対象に、キャリア展望やレディネスの実態を捉える質問紙調査およびインタビュー調査を実施した結果、全体的に性別を意識して進路決定している者が多い傾向にあった。また、仕事と同時に生活も重視し、経済的な安定も含めたワーク・ライフ・バランスに高い価値を置くが、将来設計の計画性は不足していた。そして、古典的性別役割志向と家事・育児優先志向は、これら2つに対して抑制的に作用しており、性別役割意識が強いほどキャリアの選択・決定やその後の人生設計に困難を及ぼす可能性がうかがえた。

以上から、看護専門学校の基礎教育では、生涯にわたるキャリアという視点で自己の人生を主体的に考えることが可能となるような「抵抗」の支援と充実が重要である。

キーワード：看護基礎教育，キャリア教育，キャリア形成，性別役割意識，ワーク・ライフ・バランス

1. 研究の目的と問題意識

本研究の目的は、看護職に焦点を置き、仕事も生活も含めた生涯にわたるキャリア形成を展望していくための看護専門学校の基礎教育のあり方について検討することである。

近年、技術や社会の変化に伴い職業構造が大きく変容し、この中で現代の若者は、職業構造の変化そのものへの適応力が重視されるようになってきている（境，2011；長谷川，2018）。しかし、学校から社会・職業への移行が円滑に行われなくなったために早期離職者等の若者と仕事をめぐる問題が注目されるようになり、これを解決するために登場したのがキャリア教育である（加野ら，2012）。

1999年、文部科学省によって若者の社会的・職業的自立を目指して開始されたキャリア教育の動向（文部科学省，1999；2011；2012）を見ると、初等中等教育では男女ともに正社員モデルが標準とされている（児美川，2013）。しかし、社会に出ると現実的にはライフサイクルに伴う仕事と生活の両立の問題等といった男女差が存在しており、ジェンダーの視点が不足している（谷田川，2016）。また、近年の厳しい労働環境や労働市場の中でも自分の身や生活を守るための知識や情報といった「抵抗」が不足しており、労働市場や労働政策に「適応」させることに主眼が置かれたものとなっている（本田，2009）。

したがって、社会に出る直前の高等教育段階においては、ジェンダーの視点を取り入れたキャリア教育がより重要となる。そこでは、結婚や出産等のライフイベントに伴う社会的問題やその対処の実際といった将来設計に関する多様な知が望まれる。

では、女性職とされる看護職の領域はどうなっているか。看護師養成を担う高等教育機関でのキャリア関連の教育課程の編成等を見ると、同じ看護系であっても、専門学校の基礎教育では、看護系大学学部と異なり教育課程基準にキャリア教育科目が規定されていない（看護行政研究会，

2019）。また、看護基礎教育の全体的な内容は、厚生労働省による方針の動向（厚生労働省，2007；2008；2011）から見ると、職業への「適応」に主眼が置かれたものとなっている。つまり、ワーク・ライフ・バランスを含めた人生設計を考える学びや機会が、とりわけ看護専門学校で乏しい可能性がうかがえる。

実際、看護職は結婚や出産、育児等のライフイベントや、ワーク・ライフ・バランスの重視やその他の要因によって、途中でキャリア変更をする者や離職する者が多い傾向にあり（日本看護協会，2007）、潜在看護師の問題も注目されている。こうした状況を背景に、看護師における仕事や育児等の両立に関する先行研究は多く見られており、精神面、物理面のサポートが必要であることが明らかにされている（村田ら，2010；小手川ら，2010；住田ら，2010）。しかし、核家族化や晩婚化が進む今日において、家庭内に物理的な援助を求められるのは限られた者のみになると推測され、従来から女性が担うものとされてきたケア役割（立岩，2006）は、増々女性に負担がかかりやすい状況になると思われる。

また、近年「男は仕事、女は家庭」といった伝統的な性別役割分業には否定的である一方、子どもがいてもずっと働きたいとは希望しない女子学生が多いということが明らかにされている。そして、男子学生はパートナーに「家庭志向」を望む傾向がある（津森，2015；谷田川，2016）。谷田川（2016）は、ライフコース＝キャリア意識の形成過程において、ジェンダー意識のありようが関係しており、将来のライフコース展望への意識を強く規定していることを明らかにしている。このように、女性にとって仕事と生活の両立が困難である社会構造や性別役割意識のあり方によって、ライフサイクルがその後のキャリア形成に大きく影響してくると考えられる。

2012年の日本看護協会による継続教育の基準 ver.2によると、現在、看護師のキャリア開発は、各個人の能力およびライフサイクルに応じて取り組むこととされているが、キャリア教育がない看

護専門学校を経てきた者たちの場合には、このままでは職業への「適応」しか知り得ず、ライフサイクルに伴う多様なキャリア選択を主体的に行うことが困難となる可能性がある。

男女平等が謳われる近年においても、女性がライフイベント等の影響によりキャリアの中断や変更を考えざるを得ない社会構造におかれ（三橋, 2006）、さらにキャリアの中断や停滞によって差が生じてくる可能性がある。これは、社会全体における男女共同参画の停滞にもつながり、女性の生涯における自己実現の達成が妨げられることになる可能性がある。したがって、全ての看護職者において、男女ともに現実的かつ長期的な視野で具体的なキャリア設計を考えていくためには、看護基礎教育段階という早期から教育する必要がある。

これまでに、看護師を対象としたキャリアに関する先行研究は、根本ら（2018）によればいくつか見られるが、看護学生を対象としたものは少なく、また、ジェンダーの視点から分析したものは見当たらない。よって、看護専門学校の基礎教育段階を経て入職前の学生に着目し、生涯にわたるキャリア展望の実際を明らかにする意義は大きい。

以上より、本研究では看護専門学校の基礎教育というThroughputの中で学生らがどのようなキャリア展望を描き、そのレディネスを獲得してきたのか、入職する直前の者たちを対象に、その実態を調査した。特に、ジェンダーの視点から、これらとの関連性について質問紙調査およびこれらの詳細を把握するインタビュー調査により、量的・質的に明らかにする。そして、生涯にわたるキャリア形成の観点から見えてきた現状と課題を明らかにする。それを基に、看護師を目指す看護専門学生らが生涯にわたるキャリア形成を展望していけるための看護基礎教育におけるキャリア教育の今後の展望について課題提起を行う。

2. 調査概要

(1) 調査方法と対象

① 自記式質問紙調査

対 象：

H市内におけるA看護学院3年生66名、B看護専門学校3年生27名の合計93名。

（回収率：105名中93名からの回答あり、88.6%）

これらの回答を吟味し、全てを有効回答票として分析に用いた。質問紙調査の統計分析にはIBM SPSS Statistics 23を使用した。

方 法：

H市内における調査対象施設の学校長に対し、研究の概要を記載した調査依頼書を郵送し、調査協力の同意を得られた後に調査用紙の配布を依頼した。無記名で回答を求め、返信用封筒で一括返送をしてもらった。

期 間：

平成31年2月～3月

調査内容：

看護師または看護学生のキャリア支援についての先行研究（小手川, 2010；住田ら, 2010；田中, 2013；原田ら, 2006）と、高等教育におけるジェンダー観等に関する先行研究（谷田川, 2016；津森, 2015）を参考に、次の事柄についてたずねた。

- ・対象者：年齢、性別、配偶者や子どもの有無、就労経験の有無、看護学校入学前の最終学歴、看護師になると決めた時期と動機、卒業後の進路、将来の希望職種
- ・対象者の保護者および身内：保護者、児童期における母親の労働形態と学歴、身内の医療職者の有無
- ・女性医療職者の現状についての認識、将来の家事・育児分担の考え方
- ・キャリア・アンカーについて：

自分が本当にやりたいことをよく考えるための拠り所であり、仕事体験を通じて自覚された職業上の自己イメージのことである。シャインにより開発された、自己診断用キャリア志向質問票であ

り、以下8つのキャリア・アンカーが含まれる。本調査では、このシャイン(2003)の尺度を用いることとした。

①「専門・職能コンピタンス」とは、専門職として自覚し、自己の才能を発揮することに価値をおくものである。②「全般管理コンピタンス」は、組織の経営管理や責任ある地位につき、組織の人々を動かしたいという願望を持つものである。③「自律・独立」は、組織の規則や規定にしばられず、自分のやりたいことを自分のペースで仕事をすることに価値をおくものである。④「保障・安定」は、生活が保障され、安全で安定した確実なキャリアを送ることを優先するものである。⑤「起業家的創造性」とは、新しいことを開発する等といった、創造する欲求を強く持つものである。⑥「奉仕・社会貢献」は、世の中を良くしたいという欲求に基づいてキャリアを選択するものである。⑦「純粋な挑戦」は、どのような困難な問題でも解決しようと挑戦することである。⑧「生活様式」とは、個人や家族のニーズ、キャリアのニーズをうまく統合させる方法を見出しながら、私的な生活と職業生活のバランスをとることを目指すものである。

上記の各アンカーは5項目ずつの計40項目から成り立っている。6件法で評価しており、各項目の得点範囲は5～30点である。点数が高いほどそのキャリア・アンカーに価値を置いているとされる。

・成人キャリア成熟について：

成人期におけるキャリア成熟とは、「キャリアの選択・決定やその後の適応への個人のレディネスないし取り組み姿勢のこと」であり、坂柳(1999)の尺度を用いた。近年におけるキャリアの概念は、「職業」から「人生・生涯」という視野にまで拡大し、包括的になっている(中西, 1995)ことをふまえ、以下のように構成される。

(1)人生キャリア成熟(人生や生き方への取り組み姿勢)、(2)職業キャリア成熟(職業生活への取り組み姿勢)、(3)余暇キャリア成熟(余暇生活への取り組み姿勢)の3系列があり、それぞれ①関

心性(自己のキャリアに対して積極的な関心をもっているか)、②自律性(自己のキャリアへの取り組み姿勢が自律的であるか)、③計画性(自己のキャリアに対して将来展望を持ち、計画的であるか)の3つの構成要素からなる。

全部で9つの要素で計81項目から成り立つ。5件法で評価し、各項目の得点範囲は9～45点である。得点が高いほど当該領域のキャリア成熟が高いことを意味する。

・平和主義的性役割態度スケール短縮版について：

男女の性役割態度における、平等志向性あるいは伝統志向性のレベルを客観的に測定する40項目の平等主義的性役割態度スケールの短縮版である。鈴木(1994)により開発され、15項目からなる。5件法で評価し、得点範囲は15～75点である。高得点では性役割に対して平等志向的な態度、低得点では伝統志向的な態度を有しているとみなす。ただし、本調査では、低得点では平等志向的、高得点では伝統的志向とした。

分析方法：

キャリア・アンカー、成人キャリア成熟、性別役割意識への影響について探るため、これらを従属変数とし、属性やその他の背景を独立変数としてt検定、一元配置分散分析を行った。将来の家事・育児分担に対する考え方と対象者が児童期の時の母親の働き方との関連については χ^2 検定、性別役割意識については因子分析を行った。さらに、キャリア・アンカーおよび成人キャリア成熟と性別役割意識との関連性について探るため、重回帰分析を行った。有意水準は $p < 0.05$ とした。

②半構造化面接

対象：

①自記式質問紙調査の対象校であるA看護学院2年生1名と3年生1名、B看護専門学校3年生2名の合計4名

方法：

①の質問紙調査用紙の配布の際に、インタビュー調査研究の概要・同意書も同時に配布してもらい、文書で説明した。調査協力が可能な場合

には、個別に返信用封筒で同意書を返送してもらった。後日、研究者より連絡をし、聞き取りに関する日程調整を行い、ICレコーダーを用いた半構造化面接を実施した。

期 間：

平成31年3月

調査内容：

小野（2014）による看護学生のキャリア支援に関する先行研究を参考に、以下の事柄についてたずねた。

- ・目標とする看護師像
- ・看護師としてどんなビジョンを持ち、どんなキャリアを歩んでいきたいと思っているか（仕事と生活設計をふまえて）。また、これに影響を与えた経験について。
- ・入職以降、何年先まで具体的に働くイメージを持っているか。

(2) 倫理的配慮

対象者個々に、以下を文書で説明した。

- ・質問紙の回答は無記名であり、個人が特定されないこと。
- ・データは厳重に保管し、本調査の目的以外には使用しないこと。
- ・調査協力は自由意思であり、研究に参加しない場合であっても不利益を被ることはないこと。
- ・研究終了後、直ちに回答用紙を廃棄し、パソコンへの入力データ、録音記録は消去すること。

(3) 対象者概要

本研究における対象者の属性は、表1に示す通りであり、全般的に20代の女性が対象者のほとんどを占めている。

また、対象者の全体的な特徴としては、高等学校卒業後にストレートで看護学校へ入学する女子が9割以上と多くを占めていた。そして、看護師になることを決めた時期は高校生と中学生が多く、志望動機としては、図1に示すように、主に将来の経済的な安定を重視し、看護専門学校に進学している傾向があった。

表1 対象者の主な属性

項目	内容	数	%
年齢	20代	89	95.7
	30代	4	4.3
性別	女性	86	92.5
	男性	7	7.5
配偶者の有無	あり	1	1.1
	なし	92	98.9
子どもの有無	あり	1	1.1
	なし	92	98.9
就労経験の有無	あり	14	15.6
	なし	76	84.4

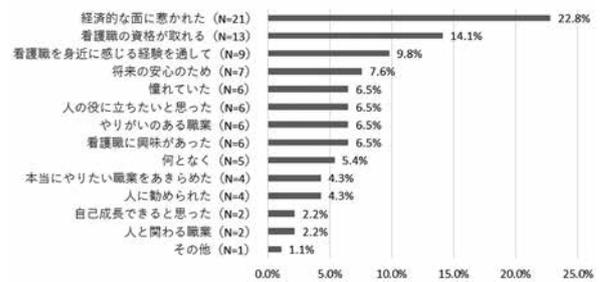


図1 志望動機

進路決定の背景や女性医療職者の現状に関する認知、将来の家事・育児分担に関する結果は、図2、図3、表2の通りである。

女性医療職者にとって育児や介護と仕事との両立が困難になる要因と考えられることについて調査した結果、図2のように「職場内の支援制度の不備」、「社会の支援制度の不備」、「配偶者の無理無支援」の順に高くなっており、家庭や職場、社会的な支援の不備が両立を困難にさせる大きな要因と捉えている傾向にあった。

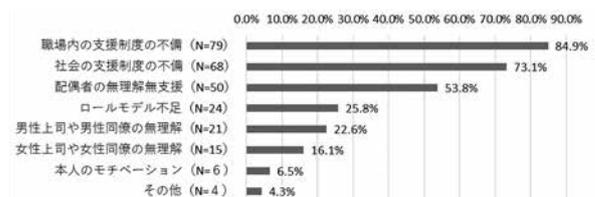


図2 仕事との両立困難な理由（複数回答）

このような認識の基での将来の家事・育児分担に対する考え方（図3）は2極化しており、結婚

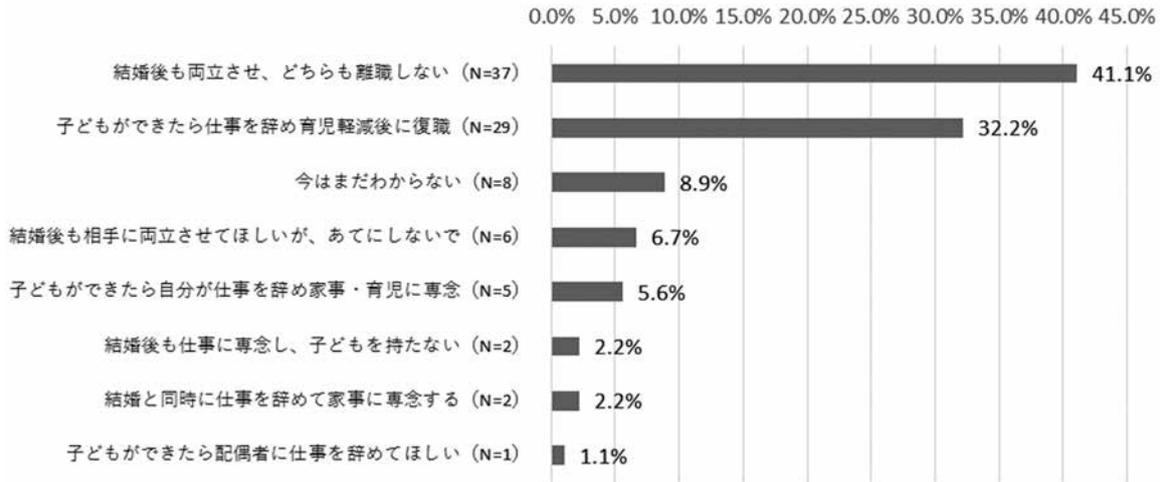


図3 将来の家事・育児分担に対する考え方

表2 母の働き方と家事・育児分担に対する考え方2群の関係

		家事・育児分担の考え方		合計	N
		「どちらも離職しない」	「M字型」		
小学生時の母の働き方	正社員	77.3%	22.7%	100.0%	22
	非正規雇用	40.0%	60.0%	100.0%	15
	専業主婦	50.0%	50.0%	100.0%	26
合計		57.1%	42.9%	100.0%	63
独立性のカイ2乗検定		カイ2乗値：5.982 有意確率：0.050			

n.s.

後も両立させて「どちらも離職しない」者と、子どもができたら仕事を辞め、育児負担が軽減した後に復職するという「M字型」が多く、表2のクロス集計の結果は有意ではないものの、対象者の母の働き方による影響の大きさがうかがえた。

3. 分析結果

(1) キャリア・アンカーの概要

対象者全体のキャリア・アンカーの降順を見ると、表3のように上位は「生活様式」, 「保障・安定」, 「奉仕・社会貢献」の順であった。

このうち性別で見ると、「保障・安定」におい

て「男子」が25.50 (標準偏差SD: 1.761)と「女子」の22.37 (SD: 3.080) よりも有意に高くなっていた ($p < 0.05$) ことから、「男子」の方が「女子」よりも仕事に安定を求める傾向があると捉えられる。また、看護師になることを決定した時期別で見ると、「生活様式」において「小学生」が25.50 (SD: 3.464), 「高校生」が21.92 (SD: 2.742), 「専門・職能コンピタンス」では「小学生」が23.75 (SD: 3.284), 「高校生」が19.43 (SD: 2.892), 「純粋な挑戦」において「小学生」が22.88 (SD: 2.900), 「高校生」が18.76 (SD: 3.370) となっており、「小学生」の方が「高校生」よりも有意に高かった ($p < 0.05$)。

したがって、教育段階の低い時期に職業決定をした者の方が、仕事と生活をともに重視し、専門

表3 対象者全体のキャリア・アンカー

キャリア志向	平均得点	標準偏差
生活様式 (N = 90)	22.71	3.145
保障・安定 (N = 90)	22.58	3.105
奉仕・社会貢献 (N = 88)	20.91	3.660
専門・職能コンピタンス (N = 90)	20.19	3.158
純粋な挑戦 (N = 90)	19.26	3.695
自律・独立 (N = 89)	19.07	3.490
全般管理コンピタンス (N = 89)	16.35	3.320
起業家的創造性 (N = 89)	14.73	3.988

* 各項目最小5点~最大30点

職として自己の能力を発揮することや困難な問題への挑戦意欲が高い傾向にあることがうかがえる。

その他どの要因から見ても上位2つのキャリア・アンカーに変化はなかったことから、全体的には仕事と同時に生活も十分に重視しており、経済的な安定も含めたワーク・ライフ・バランスに高い価値を置く者が多い、ということが浮かび上がった。

(2) 成人キャリア成熟の概要

対象者全体の成人キャリア成熟の降順を見ると、表4のように、(1)人生キャリアから(3)余暇キャリアの全てにおいて、②自律性、①関心性、③計画性の順になっていた。

このうち、看護師になることを決定した時期別で見ると、(1)人生キャリア①関心性において「小学生」が38.00 (SD: 4.282), 「高校生」31.31 (SD: 5.559), (2)職業キャリア①関心性では「小学生」が37.00 (SD: 5.416), 「高校生」30.35 (SD: 5.950) と有意差がみられた (ともに $p < 0.05$)。これより、教育段階が低い者の方が、就職に直面する時期が近い者よりも人生および生き方や、職業生活への取り組み姿勢がより前向きであることがうかがえる。

その他、どの要因から見ても、全体的には③計

表4 対象者全体の成人キャリア成熟

項目	平均得点	標準偏差
(1) 人生キャリア ①関心性 (N=86)	33.05	5.379
②自律性 (N=87)	34.47	4.485
③計画性 (N=88)	31.55	5.571
(2) 職業キャリア ①関心性 (N=89)	33.02	5.899
②自律性 (N=88)	33.47	5.103
③計画性 (N=89)	30.66	5.442
(3) 余暇キャリア ①関心性 (N=88)	33.18	6.011
②自律性 (N=88)	34.07	4.910
③計画性 (N=87)	31.40	5.695

* 各項目最小9～最大45点

画性が最下位であることに変わりはない。よって、仕事も生活も含めた自己のキャリアに対して将来展望を持ちにくく、取り組み姿勢はあまり計画的ではないことがうかがえる。

(3) 性別役割分業意識の概要

対象者全体の平和主義的性役割態度の平均得点は、最大得点75点中32.94 (SD: 7.630) 点と中間値以下であったことから、性役割態度は平等志向的傾向にあることがうかがえる。

そして、この因子分析の結果2つの因子が抽出され、性別役割分業意識は第1因子の「古典的性別役割志向」と第2因子の「仕事より楽、家事・育児優先志向」に分類された (表5)。各因子の

表5 平和主義的性役割態度スケールの因子分析結果 (プロマックス回転)

項目	1	2
(2) 結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである。	0.891	-0.071
(4) 女性のいるべき場所は家庭であり、男性のいるべき場所は職場である。	0.866	0.014
(7) 家事は男女の共同作業となるべきである。(R)	0.716	-0.231
(5) 主婦が仕事を持つと、家族の負担が重くなるのでよくない。	0.709	0.161
(10) 娘は将来主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである。	0.663	-0.030
(3) 主婦が働くとき夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびが入りやすい。	0.531	0.206
(1) 女性が、社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのが難しくなるから、そういう職業を持たないほうがよい。	0.527	-0.149
(11) 女性は、家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いたほうがよい。	0.467	0.056
(14) 経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい。	-0.161	0.794
(15) 家事や育児をしなければならないから、女性はあまり責任の重い、競争の激しい仕事をしないほうがよい。	0.167	0.712

因子抽出法: 主因子法 因子間相関: .573

Cronbach のアルファ係数は、第1因子が0.861、第2因子が0.724と高く、信頼性が示された。

これを基に表6で平均得点を見ると、「古典的性別役割志向」は低い一方、「仕事より楽、家事・育児優先志向」はほぼ中間値であった。したがって、伝統的な性別役割意識は低いが、家庭・経済状況を考慮した場合に仕事と家庭のどちらを重視するか、ということになると、中立的であることがうかがえる。

表6 「古典的性別役割志向」と「仕事より楽、家事育児優先志向」平均得点

項目	平均得点	標準偏差
古典的性別役割志向 (N = 89)	14.83 (10~50点)	5.184
仕事より楽、家事育児優先志向 (N = 88)	5.16 (2点~10点)	1.625

① 「古典的性別役割志向」の概要

対象者の属性や様々な背景から見ると有意差はなかったが、表7の看護師になることを決定した時期別で見ると、教育段階が上がるほど得点が高くなる傾向にあった。

表7 看護師決定時期別の「古典的性別役割志向」

時期	平均得点	標準偏差
小学生以前 (N = 10)	12.00	3.055
小学生 (N = 7)	12.71	2.360
中学生 (N = 27)	15.56	5.473
高校生 (N = 37)	16.22	5.528
就労時 (N = 3)	14.00	2.646
その他 (N = 4)	8.75	1.500

n.s.

また、表8の小学生時の母の働き方別で見ると、母が「非正規雇用」だった者が最も得点が高く、自身の家事・育児分担に対する考え方2群別(表9)で見ると、「M字型」を選択した者の方が、得点が高かった。

表8 小学生時の母の働き方別の「古典的性別役割志向」

母親の働き方	平均得点	標準偏差
非正規雇用 (N = 24)	17.29	6.335
正社員 (N = 30)	14.03	5.183
専業主婦 (N = 31)	13.84	3.848

n.s.

表9 家事・育児分担に対する考え方2群別の「古典的性別役割志向」

項目	平均得点	標準偏差	t 値
M字型 (N = 29)	15.17	4.001	-1.536
どちらも離職しない (N = 35)	13.60	4.139	

n.s.

以上より、社会に出る時期が近い時に職業決定した者ほど、性別を意識した決定をしていること、また、児童期の時に母が「非正規雇用」だった者や一時的に家事・育児を優先するといった「M字型」を考えている者の方が伝統的な性別役割意識が高い傾向にあることがうかがえる。

② 「仕事より楽、家事育児優先志向」の概要

対象者の属性や様々な背景から見ると、性別においてのみ有意差が認められ、「男子」が7.00と「女子」の5.02よりも有意に高かった ($p < 0.01$)。これより、「男子」の対象者数は少ないものの、女性の仕事と家庭のバランスに関しては、「女子」よりも性別役割意識が高い傾向にあることがうかがえる。

表10の看護師決定時期別においては、「古典的性別役割志向」と同様の結果となっており、社会に出る直前に決めた者ほど家庭と仕事の状況により、仕事の優先度は下がる傾向にあった。

また、表11より児童期の時に母が「非正規雇用」だった者の方が得点が高いことから、母の時間調整をしながら仕事と家庭を両立してきた実際を見てきた者の方が、状況により仕事の優先度は下がるということがうかがえる。

家事・育児分担に対する考え方2群別(表12)

では、どちらも総得点のうちほぼ中間であることから、両者ともに仕事と家庭のバランスについては中立的であると捉えられる。

表10 看護師決定時期別の「仕事より楽，家事育児優先志向」

時期	平均得点	標準偏差
小学生以前 (N = 10)	4.10	0.876
中学生 (N = 26)	5.04	1.428
小学生 (N = 7)	5.43	2.149
高校生 (N = 37)	5.49	1.574
就労時 (N = 3)	6.33	3.055
その他 (N = 4)	4.25	2.062

n.s.

表11 小学生時の母の働き方別の「仕事より楽，家事育児優先志向」

母親の働き方	平均得点	標準偏差
非正規雇用 (N = 24)	5.42	1.640
専業主婦 (N = 31)	5.13	1.310
正社員 (N = 29)	4.86	1.903

n.s.

表12 家事・育児分担に対する考え方2群別の「仕事より楽，家事育児優先志向」

項目	平均得点	標準偏差	t 値
どちらも離職しない (N = 35)	5.29	1.808	0.517
M字型 (N = 28)	5.07	1.386	

n.s.

以上の結果から、本調査における対象者は、全体的に性別を意識して進路決定し、母が性別役割意識に影響している者が多い傾向にあるということが浮かび上がった。

(4) 性別役割分業意識からみたキャリア・アンカーと成人キャリア成熟の関連

これまでの結果を見ると、性別役割意識と身内の状況やライフコース展望が関連していることが推察された。そこで、キャリア・アンカーおよび

成人キャリア成熟と性別役割分業意識の2つの因子の関連性について探っていくこととした。

①性別役割分業意識からみたキャリア・アンカー

まず、各キャリア・アンカーを従属変数とし、性別役割分業意識の2つの因子を独立変数として重回帰分析を行ったところ、全体的には有意な関連は見られなかった。しかし、多くのキャリア・アンカーにおいて負の回帰係数が認められた。

第一因子の性別役割分業意識である「古典的性別役割志向」から見ていくと、この志向が高くなるほど「専門・職能別コンピタンス」,「純粋な挑戦」,「自律・独立」,「保障・安定」,「奉仕・社会貢献」,「生活様式」の7つのキャリア・アンカーが低くなる傾向にあった。これより、伝統的な性別役割意識が強い者ほど、専門職として自己の才能を発揮することや、困難な問題に挑戦すること、自分のペースで仕事をする事や、安全で安定した確実なキャリア、世の中を良くしたいという欲求、私的な生活と職業生活のバランスをとることに対して、価値を高くは置かないことがうかがえる。

次に、第二因子の「仕事より楽，家事育児優先志向」においては、この志向が高くなるほど「専門・職能別コンピタンス」,「純粋な挑戦」,「全般管理コンピタンス」,「起業家的創造性」の4つのキャリア・アンカーが低くなる傾向にあった。よって、仕事や家庭の状況によっては仕事の優先度を低くする者ほど、専門職として自己の才能を発揮することや困難な問題への挑戦、責任ある地位につくこと、創造性に対する価値を低く置くことがうかがえる。

以上の結果をまとめると、それぞれの性別役割分業意識が強いほど多くのキャリア・アンカーが低くなり、職業的側面における価値付けは弱くなる傾向にあるということが明らかになった。

②性別役割分業意識からみた成人キャリア成熟

次に、成人キャリア成熟を従属変数とし、性別役割分業意識の2つの因子を独立変数として重回

帰分析を行った。

その結果、「古典的性別役割志向」は、成人キャリア成熟全ての領域にわたって負の回帰係数が認められ、その多くが有意であった（表13～17）。つまり、「古典的性別役割志向」が高いほど全ての成人キャリア成熟が低くなる傾向にあると捉えられる。

表13 (1)人生キャリア①関心性を従属変数とした規定要因分析の結果

	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率
古典的性別役割志向	-0.284	-0.279	0.023*
仕事より楽, 家事育児優先志向	-0.249	-0.076	0.529
(定数)	38.604		0.000
N	85		
決定係数	0.104		
自由度調整済み決定係数	0.083		
回帰のF検定	F値: 4.779 有意確率: 0.011		

*p < 0.05

表14 (1)人生キャリア②自律性を従属変数とした規定要因分析の結果

	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率
古典的性別役割志向	-0.426	-0.490	0.000***
仕事より楽, 家事育児優先志向	0.017	0.006	0.956
(定数)	40.681		0.000
N	86		
決定係数	0.237		
自由度調整済み決定係数	0.219		
回帰のF検定	F値: 12.890 有意確率: 0.000		

***p < 0.001

表15 (1)人生キャリア③計画性を従属変数とした規定要因分析の結果

	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率
古典的性別役割志向	-0.313	-0.289	0.013*
仕事より楽, 家事育児優先志向	-0.657	-0.193	0.094
(定数)	24.145		0.000
N	87		
決定係数	0.175		
自由度調整済み決定係数	0.155		
回帰のF検定	F値: 8.913 有意確率: 0.000		

*p < 0.05

表16 (2)職業キャリア①関心性を従属変数とした規定要因分析の結果

	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率
古典的性別役割志向	-0.338	-0.297	0.013*
仕事より楽, 家事育児優先志向	-0.319	-0.087	0.456
(定数)	39.666		0.000
N	88		
決定係数	0.121		
自由度調整済み決定係数	0.101		
回帰のF検定	F値: 5.864 有意確率: 0.004		

*p < 0.05

また、「仕事より楽, 家事育児優先志向」では有意な関連は見られなかったものの、(1)人生キャリアの①関心性と③計画性、(2)職業キャリアの①関心性、②自律性、③計画性において負の回帰係数が認められ、(3)「余暇キャリア」以外にはほぼ抑制的に作用していた。よって、「仕事より楽, 家事育児優先志向」が高いほど、人生および職業キャリア成熟の多くが低くなる傾向にあるといえる。これらの結果より、本調査における対象者の計画性に欠けていた成人キャリア成熟は、性別役

表17 (3)余暇キャリア②自律性を従属変数とした規定要因分析の結果

	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率
古典的性別役割志向	-0.423	-0.449	0.000***
仕事より楽, 家事育児優先志向	0.662	0.219	0.060
(定数)	36.958		0.000
N	87		
決定係数	0.153		
自由度調整済み決定係数	0.133		
回帰のF検定	F値: 7.588 有意確率: 0.001		

*** p < 0.001

割分業意識が強いほど多くの領域にわたり低くなり、キャリアの選択・決定やその後の人生設計に困難を及ぼす可能性がうかがえた。

4. 考 察

これまでに、看護基礎教育でのキャリアの学びを明らかにするために、看護専門学生を対象に彼らのキャリア観や性別役割意識について見てきた。その結果、次の事が明らかになった。

第一に、対象者の多くは高等学校卒業後にストレートで看護専門学校へ入学しており、将来の経済的な安定を重視し、性別を意識した進路決定をしている傾向にあった。また、身内の性別役割分業のあり方が、自己の将来の働き方の考えに影響している傾向にあった。こうした特徴のある学生らは、不況等の不安定な社会状況や、近年の仕事と余暇の両立を志向する国民的な流れ（厚生労働省、2000）を背景に、仕事と同時に生活も十分に重視しつつ、経済的な安定も含めたワーク・ライフ・バランスに高い価値を置く傾向にあった。

しかし、人生経験が不足しているため、ライフサイクルに伴う仕事と生活の両立に関する具体的な問題や対処については漠然としたイメージにすぎないものと推察される。そして、これまでの教

育の場においてもこうした現実的な問題について知る機会が乏しいため、身内や身近に関わる者や、メディア等の限られた情報に促され（児美川、2013）、対処していく可能性が高い。ライフスタイルが変化し、看護職も多様化してきている現在においては、多様な生き方をふまえた人生設計が困難になる可能性がある。

第二に、対象者の成人キャリア成熟は、仕事も生活もふまえたキャリア全体を重視しているが、計画性は不足している傾向にあるということである。職業への「適応」を主とした基礎教育を経てきた学生らは、就職直前の時期において、自己の人生の全体的なキャリアに積極的に関心を持ち、その取り組み姿勢は自律的である一方で、計画性はそれほど成熟していない傾向があった。

これらの結果はインタビュー調査においても見られた。対象者の語りからは、まずは「看護師として基本的な仕事ができるようになること」が目下の目標とされ、その具体的な見通しは1～3年と短期的なものであった。また、その後の職業キャリアについて関心はあるものの、漠然としており、十分に考慮していない傾向にあった。その一方で、人生におけるライフイベントに直面した時の対処については、身内の情報やその性別役割分業のあり方および働き方に促されやすく、実際の仕事と生活の両立に向けた将来設計には矛盾や曖昧さがあった。

女性のライフコース展望や性別役割意識に関しては、身内の影響を受けやすいことが明らかにされ（中西、1998；谷田川、2016）ており、このまま職業へ移行することになると、将来の具体的な見通しが立てられず、人生における自己実現の達成が困難になる可能性がある。

第三に、性別役割意識は、多くのキャリア・アンカーと成人キャリア成熟に対して抑制的に作用していた。木村（2016）も性別役割意識をはじめとするジェンダー要因が女性のキャリアに関する意識に対して同様の傾向があることを明らかにしている。これより、看護師という資格を持った専門職であっても、性別役割意識がキャリアの選

択・決定やその後の人生設計に困難を及ぼす可能性がうかがえる。

長寿社会となった現代においては、仕事も生活も含めて生涯にわたるキャリアという視点で考えていくことが自己実現につながってくる（西岡ら，2013；森田ら，2018）。男女平等が実現されていると思われる現代においては、伝統的な性別役割意識は低くなってきている。しかし、女性も仕事は持つが、家庭内役割の負担等の状況を考慮するとなると中立的になる傾向があった。これより、未だに根底には性別役割意識があること、そしてそれが職業的側面のキャリア発達の妨げとなる可能性があることが浮き彫りとなった。

したがって、看護専門学校の基礎教育では職業への「適応」だけではなく、社会に出る前に、生涯にわたるキャリアという視点で自己の人生を主体的に考えることが可能となるような「抵抗」の支援と充実が重要である。そのためには、山崎（2017）が言うように、ライフサイクルに伴う仕事と生活の両立の問題等といったジェンダーの視点をふまえ、ワーク・ライフ・バランスを含めた人生設計を具体的に考えるためのキャリア教育が必要である。

具体的には、職業だけではなく生活も含め、人生全体として捉えるといったキャリアの概念や、ジェンダーに関する問題について知ることが必要である。そして、本調査結果では、将来の家事・育児分担に対する考え方は、「どちらも離職しない」と「M字型」が多かったことから、ライフサイクルに応じた生活と職業キャリアの両立とその困難さの実際についての知識も必要である。また、看護職としてのキャリア継続を考えている者が多いということから、ライフサイクルに応じた看護師としてのキャリア形成の実際として、多様なキャリア・アップや、その具体的な働き方と両立の方法、これらのロールモデルの提示等も将来設計を具体的に考えていく上では重要な情報である。

5. まとめ

本研究の目的は、看護職に焦点を置き、看護専門学生が生涯にわたるキャリア形成を展望していくための看護基礎教育のあり方について検討することであった。

看護専門学校における基礎教育は、基本的な看護実践ができるための「適応」を主としたカリキュラムであり、臨地実習や講義、学習環境等のThroughputを経てきた者たちの基礎教育修了時点における将来の見通しは、生涯にわたるキャリア展望といった長期的な視野に欠けるものであった。

卒業後の看護職のキャリア開発については、各個人の能力およびライフサイクルに応じてキャリアをデザインし、自己の責任でその目標達成に必要な能力の向上に取り組むこととされている。しかし、男女平等が常識的になっている現在においても、人々は性別役割に沿った人生に促されやすく、本調査においてもこれを裏付ける結果が得られた。

本調査の対象者は、全体的に身内の性別役割分業のあり方やそれに関する情報の影響を受けつつ、自己の性別を意識して職業決定をしている者が多い傾向にあった。そして、仕事において何を大事にしていきたいのか、また、人生キャリアという広い視野で自分の人生に関心を持ち、人生設計を主体的に考えていくという、キャリア発達に重要な要素が、性別役割意識によって抑制されてしまう可能性が見出された。

看護基礎教育のThroughputの中で、ライフイベントに伴う問題や対処方法等といった、仕事と生活の両立を含めて具体的に人生設計を考えていくための知識や情報といった「抵抗」の部分がないままに社会に出てしまうと、無意識のうちに性別役割に促されてしまい、主体的な生き方を選択できず、計画性に欠ける人生となり、人生における自己実現が達成できない恐れがある。

看護職者は様々な患者やその家族とのかかわりを通して人生観や看護観が形成されるものであ

り、女性が家庭に専念することに対して肯定的な受け止めをしやすい可能性がある。これまでに経験してきたプロセスそのものがキャリアとなる（濱田，2018）ため、そうした選択をすることも一つではあるが、性別役割に促された受け身な姿勢ではなく、主体的に自分が納得して選択していくことが望まれる。また、一度決定したとしても、その後のライフサイクルに合わせて変更することも可能であるということをもふまえ、その都度柔軟に考えて対処していくことも重要（児美川，2013）である。

そのためには、仕事と家庭の両立ができていない者、キャリアを中断して復職する者等といった、多様な生き方と具体的な対処方法について知ることが必要である。特に、今後も変化し続ける社会の中で現実的な対処を考えていくためには、その都度社会状況に合わせた知識や情報が必要となってくる。したがって、職業が決定した時点でキャリア教育は終了ではなく、その後の生涯にわたるキャリア展望を考えていくことが重要であり、そのための「抵抗」にあたる教育も必要である。

今回は、地方都市の看護専門学生を対象としたが、大都市等の他地域や、大学の看護系学部の学生の場合には、異なる傾向を示す可能性がある。また、今回は女子学生が多かったが、近年増加傾向にある男子学生や社会人経験者の看護学生を対象とし、キャリア意識の実際について調査し検討していくことも必要である。

全ての看護職者にとって、生涯にわたるキャリアを主体的に考えていけるようなキャリア教育について検討していくことが今後の課題である。

〈付 記〉

本稿は、第1著者が独立に分析を行い、その結果をまとめたものである。第2著者は全体のトーンの統一に務めた。

6. 参考文献

- 小野麻由子，2014，「看護基礎教育修了時のキャリアビジョンに影響する統合実習の学び」『日本赤十字秋田看護大学紀要・日本赤十字秋田短期大学紀要』，第19号，pp.35-43.
- 加野芳正，越智康詞，2012，『新しい時代の教育社会学』ミネルヴァ書房.
- 看護行政研究会編，2019，『看護六法』新日本法規.
- 木村涼子，2016，「PartⅢ ジェンダーと教育の歴史」『教育の社会学』，有斐閣アルマ，pp.140-218.
- 厚生労働省，2000，『女性労働白書』.
- 厚生労働省，2007，『看護基礎教育の充実に関する検討会報告』.
- 厚生労働省，2008，『看護基礎教育のあり方に関する懇談会論点整理』.
- 厚生労働省，2011，『看護教育の内容と方法に関する検討会』.
- 小手川良江，本田多美枝，阿部オリエ，本田由美，寺門とも子，八尋万智子，2010，「看護師の「職業キャリア成熟」に影響する要因」，『日本赤十字九州国際看護大学IRR』，第9巻，pp.15-25.
- 児美川孝一郎，2013，『キャリア教育のウソ』筑摩書房.
- 境忠宏，2011，「キャリア研究の発展とキャリア教育の今後の課題」『国際経営・文化研究』，第16巻第1号，pp.13-26.
- 坂柳恒夫，1999，「成人キャリア成熟尺度（ACMS）の信頼性と妥当性の検討」『愛知教育大学研究報告』48（教育科学編），pp.115-122.
- シャイン.E.H.，2003，『キャリア・アンカー—自分の本当の価値を発見しよう—』白桃書房.
- 鈴木淳子，1994，「平和主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成」『心理学研究』，第65巻第1号，pp.34-41.
- 住田陽子，坂口桃子，盛岡郁晴，鈴木幸子，2010，「看護師のキャリア・アンカー形成における傾向」，『日本看護研究学会誌』，第33巻第2号，pp.77-82.
- 立岩真也，2006，「第12章本論1 ケアとジェンダー」，江原由美子，山崎敬一編『ジェンダーと社会理論』，有斐閣，pp.210-221.
- 田中里美，2013，「看護基礎教育におけるキャリア成熟に関する調査研究」『愛知教育大学平成23年度修士論文抄録』.
- 津森登志子，2015，「医療系大学生の男女共同参画・ライフスタイル・就労継続に関する意識—1年生へのアンケート調査から—」『人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌』，第15巻第1号，pp.57-66.
- 中西信男，1995，『ライフキャリアの心理学—自己実現と成人期』ナカニシヤ出版.

- 中西祐子, 1998, 『ジェンダー・トラッカー—青年期女性の進路形成と教育組織の社会学—』東洋館出版社.
- 西岡正子, 桶谷守編, 2013, 『生涯学習時代の生徒指導・キャリア教育』教育出版.
- 日本看護協会, 2007, 『潜在ならびに定年退職者看護職員の就業に関する意向調査報告書』.
- 日本看護協会, 2012, 『継続教育の基準ver.2.』.
- 根本香代子, 原華代, 坂口桃子, 2018, 「わが国における看護師を対象としたキャリア研究の動向」『常葉大学健康科学部研究報告集』, 第5巻第1号, pp.93-101.
- 長谷川誠, 2018, 「キャリア教育政策の展開と今日的課題—初等中等教育から高等教育への接続を視点に—」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部編』, 第7巻, pp.27-41.
- 濱田安岐子, 2018, 『看護師のためのキャリアデザインBOOK』つちや書店.
- 原田広枝, 山本千恵子, 北原悦子, 篠原純子, 壬生隆一, 2006, 「看護学生のキャリア志向とキャリア開発支援に関する研究」『九州大学医学部保健学科紀要』, 第7号, pp.13-22.
- 本田由紀, 2009, 『教育の職業的意義—若者, 学校, 社会をつなぐ』筑摩書房.
- 三橋弘次, 2006, 「第12章本論2 労働とジェンダー」, 江原由美子, 山崎敬一編『ジェンダーと社会理論』, 有斐閣, pp.222-229.
- 村田梢, 佐々木美佳, 妹尾衣里, 正清涼子, 三世川志穂, 斎藤美和, 森木妙子, 2010, 「既婚看護師の仕事と家庭生活の両立における必要なサポートとエンパワメント」『看護・保健科学研究誌』, 第8巻1号, pp.1-12.
- 森田敏子, 魚崎須美, 早川佳奈美, 細川つや子, 上田伊佐子, 2018, 「看護基礎教育と看護継続教育の歴史的変遷からみた専門職としての看護キャリア形成」『徳島文理大学研究紀要』, 第95号, pp.95-113.
- 文部科学省, 1999, 『初等中等教育と高等教育の接続について』.
- 文部科学省, 2011, 『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育のあり方について』.
- 文部科学省, 2012, 『キャリア教育の推進について』.
- 谷田川ルミ, 2016, 『大学生のキャリアとジェンダー—大学生調査にみるキャリア支援への示唆—』学文社.
- 山崎聡子, 2017, 「同志社女子大学看護学部におけるキャリア教育の現状と今後の展望について」『同志社看護』, 第2巻, pp.1-6.

(寺田明矢子 函館校大学院生)

(木村 育恵 函館校准教授)